Jiro's Bar

Come to talk in my room

No. 10

濱田滋郎対談

構成　安東　春
写真　朝倉信章

――今回、清里スペイン音楽祭に参加してみて、いかがでしたか？

西澤　スタッフの方から何から、音楽大好き人間が、自分の“大好き”をみんなと分かち合いたい、という、その雰囲気がまず素晴らしかったですね。こういう人たちに出会えて幸せでしたし、本当の意味での音楽がありました。ほかの方々の演奏も、そのあとの交流も、なんだかんだ言っても音楽の話になるところが、やっぱり本当に音楽が好きなんだなと、ほかの音楽祭ではなかなか味わえない貴重な体験をさせていただきました。ギターの方をこんなにたくさん身近で見たり聴いたりするのも私たちにとってすごくゴージャスな体験で、「こういうのどうやって弾くの？」とか訊いたりして、本当に掛替えのない経験をさせていただきました。

――そういう意味でこのスペイン音楽祭がお役に立てたのだったら、本当に嬉しいと思います。

西澤　唯一無二の経験をありがとうございました。

◆一瞬一瞬を最大限に謳歌するスペイン音楽

――音楽祭と東京ではファリャとアルベニスを弾かれました。ファリャは2枚素晴らしいディスクを出しておられて、スペインでも日本でもたいへん好評ですね。

西澤　ありがとうございます。ファリャという作曲家自体は有名で、映画にも使われた有名なフレーズはいくつかあるんですが、知られてない作品も多いですよね。

――そうですね、バレエ曲はまだしも、ピアノ曲となると一部のファンしか知らないのが少し残念でしたね。この素晴らしいディスクは、その認識を改めるためにも役立つんじゃないかと思います。それほどファリャに惹かれたきっかけはどういうことだったんでしょう。

西澤　私が最初にスペインを意識したのが、やっぱりファリャだったんです。『セビリアの理髪師』とか『フィガロの結婚』とか『ドン・ジョヴァンニ』とか、スペイ

Guest of the month

西澤安澄

Azumi Nishizawa

（ピアニスト）

桐朋学園女子高等学校音楽科を卒業、同大学にて神谷郁代、岡本美智子、池田素子に学ぶ。その後ジュネーブ音楽院大学院にてドミニク・メルレの薫陶を受けた。2002年に同音楽院のヴィルテュオジテ（演奏家コース）を満場一致の一等賞で卒業後、スペインを代表するピアニストで名教授のホアキン・ソリアノに招かれ、拠点をマドリッドへ移し世界各国で活発な演奏活動を開始。

2010年春には、スペインのレーベルVERSOより「マヌエル・デ・ファリャ　ピアノ作品全集」をリリース、スペインが世界に誇る偉大な作曲家ファリャの数少ない、そして初めての本格的なピアノ曲全集CDを造る歴史的プロジェクトとして、ファリャの遺族、スペイン精鋭の音楽学者らの積極的な応援のもと、異例の日本人のピアニストとして起用された。

2012年5月には新たにCD「ファリャ：ピアノ編曲全集」を発表。レコード史上世界初のファリャ・ピアノ作品全集という面においても、新たなファリャ作品の資料として注目を浴びている。

ンは結構音楽家のファンタジーをかき立てる国で、いろいろ気になる存在ではあったんですけれども、特に衝撃を受けたのが、私が好きなドビュッシーとカップリングになっていた〈スペインの庭の夜〉と〈ファンタシア・ベティカ〉だったんです。たしかアチューカロさんが弾いていて。ほんとに夢中になって聴きにいった覚えがあって（笑）。あまりの衝撃で、そのときは、まさか自分がこれを表現できると思わなかったです。

――それは桐朋学園で？

西澤　はい。高校に入り立ての時ですね。その後教えていただいたジュネーヴ音楽院のドミニク・メルレ先生も実はすごくファリャが好きで、嬉しくて先生と一緒に勉強したんですけれども、やっぱりその血と肉になった土台のものを知りたいと思ってマドリッドに行ったんです。アルベニスやグラナドスや、ルイス・デ・パブロのような現代作曲家、本当にいろんな作曲家がいる中で、やっぱり私にとってファリャは特別なんですね。でも勉強しようと思ったときに、なかなか楽譜が手に入らない。そのとき、ファリャの遺族の方が持っているマヌエル・デ・ファリャ・エディシオンのことを知りまして。いろいろ話していたら、グラナダにお姉さんがいるから行って訊け、と言われまして。それでグラナダに行って、ファリャが残した直筆譜からメモからみんな見せてもらって。でも素晴らしい作品があるにもかかわらず、聴く機会がないものが多くて残念だと話してるうちに、スペイン音楽をもっと広めようとしているベルソというレーベルから、ファリャの企画をいただいて。日本人の私でいいのかなと考えたんですが、日本人だからこそ見えるスペインの良さ、というのがあると思うんです。ユニバーサルな意味で万人が好きな音楽なんだ、ということをもっとアピールできるんじゃないか、と思ったんですね。それで研究を続けて、演奏させていただいて。

――ファリャの音楽を演奏するうえで、特別に難しいポイントとかありますかね。

西澤　ありますね（笑）。素晴らしいピアニストだっただけあって、やらなきゃいけないことが楽譜にたくさん書き込んであるんです。ペダルひとつにしても、響きを厚くしたいためなのか、音色を変えるためなのか。そこらへんの背景がわからなきゃいけないという意味で、ファリャの生き様や影響を受けた音楽を聴いていると、やっぱり華やかさやリズミカルな部分、あざやかな指さばきに目が行きがちなんですよね。でも私がいちばん好きなファリャは、初期のころから本当に死ぬ間際まで、爽やかな、媚びない、清潔感のある色気があって、音も研ぎすまされた最低限の音で書かれているので、音と音の大切さとか意味とか間合いとか、そこらへんを考えるのがなかなか大変でしたね。

――第1集がオリジナル作品集で、第2集が編曲集ですね。編曲といってもファリャ自身が書いてますから、ピアニストとしてもすぐれたファリャが、ピアノでいかに効果が出るかということを考えながら書いた譜面だと思うので、立派なオリジナルと思っていいわけですよね。

西澤　そうですね。ラローチャもCDに率先して入れてらっしゃいますしね。

――その中でギタリストにとってたいへん興味がありますのは、〈ドビュッシーの墓に捧げる讃歌〉。これもファリャによるピアノ・バージョンですよね。これをお弾きになるにあたっては、どういう工夫というか、心構えをお持ちだったでしょう。

西澤　これをピアノ曲と思うかギター曲と思うかというのは私たちの間でもいつも論争になるんですよ。もともと、チェンバロやギターの弦の響きもすごく好きなので。この曲を弾くにあたっても、ギターの演奏は本当にたくさん聴いて。で、聴けば聴くほどギターの良さというものに惚れていくんですけど、音と音の間を歌える楽器というんですか……

――ギターはそれが命みたいなものですから。音と音の間を聴くというね。

西澤　それとやっぱり、何回弾いても、何回楽譜を読んでも、亡き友を偲ぶというのが本当に心を打ちますね。

――そうすると、ギターの響きというものを心に置きながら弾かれたという。

西澤　はい。ファリャがピアノ譜として出したということは、ピアノで弾く意味がなければいけないわけだし。

――その兼ね合いが難しいけどおもしろいですね。

西澤　ギターはピアノみたいに大音量でいかない、その親密性みたいなものには憧れますよね。

――スペイン音楽祭でもプログラムの中に入れてくださいましたね。

西澤　なんて無謀なことをしてしまったかと（笑）。

――たいへん感動的でしたよ。

西澤　ありがとうございます。やっぱり弾いていてもすごく楽しいし。なんでこんなにスペインの音楽が好きなのかとみんなに訊かれて、好きなものをなぜ好きかと訊かれてもわからない、と答えてたんです。でも――今の一瞬一瞬をいかに慈しんで生きるか、それを最大限に謳歌するような姿勢が、スペインの音楽にはありますよね。アルベニスが死を間際にして書いた『イベリア』にも、どうしようもない愛おしさみたいなものを感じます。生きていると病気や難しいことや苦しいこともある、でも生きているのはいいことなんだ、という。私にとっても、生きてるイコール音楽なんですね。だから、そういう音楽が手放しにいいなと、このごろ思えるんです。

――生きる喜びとか感動とか、それをスペイン人はメロディー、ハーモニーだけじゃなくて、リズムで表せるところが素晴らしいと思いますね。

西澤安澄　ファリャII　ピアノ・トランスクリプション全集　PMCC-1690

西澤　そうですね。このリズム感も、掘り起こしていくとみんな持ってるものだから、そういう意味で日本人もみんな好きなんじゃないかと思います。
――スペイン人と日本人の物の感じ方はどこかで共通してるんだとスペイン人が言いますし、私もそう思いますね。スペインの文化芸術には、どこかに西洋的な感性とは違った、東のほうからの色合いというものが入っていると思うんですよね。
西澤　グラナダでも、いろんな文化に目を開かれましたね。アラブのほうが寛容で、キリスト教徒もユダヤ教徒も認めて仲良く暮らしてた時代があったし、やっぱりイスラム文化も素晴らしい豊かなものがありますし。
――現代の人は錯覚してますけど、中世の、アランブラ宮殿ができたころまでは、文化の程度はイスラム圏のほうが高かったんですからね。公衆浴場もそうだし、そういったものがあって暮らしてたという点では、その時代のパリとかウィーンよりは遥かに上だったんですよ。アルベニスやグラナドスが書いた〈オリエンタル〉なんかも、単なるエキゾティシズムというよりは、自分たちの血の中にあるものに対する一種のノスタルジーだと思うんです。自分の国の中にオリエンタルがあるんですから。
西澤　あの時代は、ドビュッシーにしても国外にインスピレーションを探してたけれども、スペインに関しては自分の国のものを探せばよかったんだという……〈オリエンタル〉にしても〈ラ・ベガ〉にしても、聴くたびにモザイクの爽やかな感じがして素晴らしいですよね。
――本当に、東の文化と西の文化が絶妙に溶け合ってますよね。ヨーロッパの中央部から見るとスペインはちょっと毛色が変わってエキゾチックで、ローカルと言われるかもしれないんだけど、本当は逆ですよね。だって、西洋、東洋両方含んでいるほうが遥かにユニバーサルじゃないですか。
西澤　本当に学問としてきっちりしたところもあれば、情緒的な、人間の機微に触れたところもあり、魅力は尽きないですよね。

◆その年齢でないと表せないものが確かにある

――清里では、ファリャのほかにアルベニスも、しかも難しい〈イベリア〉から2曲を弾いてくださったんですけれども、アルベニスはこれからも盛んに弾いていかれるおつもりですか。
西澤　はい。ほかにもグラナドスとかトゥリーナとか、いろいろ現代の曲もやっていきたいとは思っているんですけど、〈イベリア〉はやはり全部素晴らしくて。私、今の年齢で弾く〈イベリア〉と70ぐらいになって弾ける〈イベリア〉とは、違うと思うんです。どんどん、深いものが出てくると思うんだけど、今の私が熱烈に思う、こういうのだな、というのがあるんですね。
――若いころに一度弾いておかれるのはとてもいいことだと思いますね。ラローチャさんも、若いときの演奏には、円熟されたときとは違う、その年齢じゃないと弾き表せない魅力が確かにありますね。キレの良さというか、情熱というか、バイタリティというか。
西澤　そうですね。〈イベリア〉は、テクニカルな面が取りざたされることが多いんですが、私はそういった意味では惹かれたことがなかったんです。〈イベリア〉には地名が書いてありますが、ただその土地を表してる音楽ではなく、その土地を思う心象風景と言うんでしょうか、もう戻らない何かとか、どうしようもない深いものがせつせつと出てくる音楽で、それがきっかけで私は弾きたいと思ったんです。もちろんテクニック的な鮮やかさもおもしろさもないといけないんだけど、本当に出したいのは風光明媚なきれいさじゃなくて、騒がしい中の人間のいとおしさ、かなしさがあると思うんです。
――本当にそのとおりですね。人間のあらゆる感情というものが〈イベリア〉の中に含まれていてね。そういう意味では本当にユニバーサルな音楽だと思いますね。
西澤　〈イベリア〉に限ったことではないんですが、多面性に富んだ時間枠のずれを感じます。それを私の体とピアノ1台で表せるのか、それはピアニストとして、非常に刺激的な挑戦だと思います。
――本当に〈イベリア〉は素晴らしいレパートリーだと思いますね。ドビュッシーやメシアンのような音楽家がこれは最上級のピアノ音楽だと言ってるのに、それを本当に認識してる人はまだ少ないですね
西澤　とはいえ、スペインで外国人がスペインの音楽を弾くことに対しては閉鎖的じゃないですよね。ファリャ

の遺族の方も、私が質問するとすぐお答えいただいて。
――そのファリャのご遺族とおっしゃいますと、どういう関係になる方々ですか？
西澤　弟のエルマンさんの子孫です。エルマンさんは〈はかなき人生〉をファリャがコンクールに出すときに清書を間違えたことで有名なんですが（笑）、建築家だったそうです。そのヘルマンさんの娘さんのイサベルさんが、フンタ・デ・アンダルシアとグラナダと協力して、フンダシオン・アルチーボ（文献資料財団）・マヌエル・デ・ファリャを旗揚げしたんです。今はイサベルさんの末娘のアナさんやそのお姉さんのエレナさんにお世話になっています。コンサートも一緒に車で連れてってくださるし。
〈三角帽子〉にしても、最終稿の前にファリャが幾つも書き直したものがいくつもあるわけなんです。それを見せていただくと、「そうか、いちばん大切な音はこれなんだ」と、そういうことがわかってくるので。
――そういうことも大事ですね。グラナダのマヌエル・デ・ファリャ国立音楽堂で演奏なさったんですよね。
西澤　そうなんです。ファリャの聖地でファリャのオリジナルの曲を一晩ですべて弾かせていただきました。グラナドスのお孫さんにも来ていただいて。そんな素晴らしい環境で演奏させていただきました。本当に居心地がいい、あたたかみが素晴らしいホールでした。
――あれはどなたが建てられたんですか。
西澤　イサベルさんの旦那さんです。マドリッド音楽堂も作った、ガルシア・デ・パレデスという有名な方です。コンサート終わったあとも、皆さんあたたかくて、「ピアニスタ、オレー！」とか言ってくれるんです。本当にファリャと言う人は不思議ですよね。言葉にするとえげつないけど（笑）本当に官能的な高まりのある音楽で、でもご本人は神父さんみたい（笑）ですよね。
――そういえば〈チェンバロ協奏曲〉は大傑作だと私は思うんですけど、あれを弾くためにはやっぱりチェンバロを習わないとダメですかね。
西澤　あ、でもファリャ自身も弾いてるんですよね。本当に、柳の下の2匹目のドジョウは狙わない、というのがファリャの潔いところで。
――ひとつの傾向の曲を作ったら同じようなものはもう書きませんよね。チェンバロも勉強されたんですか。
西澤　はい、マドリッドで。スペインというのは、結構バロックの音楽が盛んなんですね。
――そうですね、古楽盛んですね。
西澤　ちょっとコアなメンバーでいろんなところに行きました。オルガンまで弾かされましたよ（笑）。今まで華やかな高音に意識が行きがちだったんだけど、やっぱりそこで低音の大切さをすごく学びましたね。
――これからのご活動ですけど、これまではイタリアでしたね。この秋からスペインに行かれるんですか？
西澤　スペインでは7年間マドリッドで集中した生活を送りまして、そのあと主人がイタリア人なのでマドリッドとベネツィアを行ったり来たりの生活をしていたんですが、やっぱりトゥリーナもすごい好きだし、あとフラメンコのアーティストも尊敬していて、いろいろ勉強したいことを今究めたい、今じゃなきゃ嫌だ（笑）というので、これから晴れてマラガ近くのマルベージャで、やっていきたいと思っています。スペイン音楽祭で聴いたマラッツ、あれよかったです、弾きたいと思いました。
――あれはタレガがみごとにギターにアレンジして、ギター曲として知られたけど、もとはピアノ曲で。20歳のグラナドスから15歳のマラッツに献呈されて（笑）。
西澤　その団結精神はすごいですね。
――近代スペイン音楽をやってて気持ちいいのは、本当にお互いに仲がいいんですよね。アルベニスとグラナドス、グラナドスとファリャ、ファリャとトゥリーナ。
西澤　そうですよね。私が言っても夢物語なんですけど、排除するよりも、同じことやる人がたくさんいれば、それだけ人間が豊かなんだなと思いますよね。
――人間関係がギスギスしたことろがなくてね。
西澤　今回清里スペイン音楽祭で、ギターを好きな人たちが目くじらを立てずに、みんなお互いリスペクトし合っているのが本当にいいなと思って。それを濱田先生が守護天使のように見守っている感じで（笑）。
――今のギターの世界は本当に人柄が温かくていいですね。安澄さんもどうかますます交流を深めてください。

2013年清里スペイン音楽祭にて